



Title	サハ語の動詞屈折形式とその統語機能
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 3, 11-23
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52596
Type	bulletin (article)
File Information	02_EBATA.pdf



[Instructions for use](#)

[特集 動詞屈折形式]

サハ語の動詞屈折形式とその統語機能

江 畑 冬 生

(日本学術振興会特別研究員／東京外国語大学 AA 研)

1. はじめに

サハ語 (ヤクート語) はチュルク諸語の 1 つであり, 主としてロシア極東のサハ共和国で話されている¹. この言語の動詞屈折形式は伝統的に定動詞・形動詞・副動詞の 3 種に分類されてきた (以下, 伝統的に形動詞と呼ばれてきたものは本特集の趣旨に従い分詞と呼ぶ). 本稿の主な主張は 2 点ある. 1 つは, サハ語の動詞屈折形式がその統語機能と密接に関連する点である. もう 1 つは, 分詞および副動詞の動詞性が, 定動詞と比べて大きく劣るものではないという点である.

本稿の構成は次の通りである. 第 2 節では, サハ語動詞形態法の概要を述べる. 第 3 節から第 5 節ではそれぞれ, 定動詞・分詞・副動詞の用法について記述する. 第 6 節では, 動詞屈折形式の種類とその統語機能の間に密接な関連があることを指摘する. 第 7 節では, 分詞および副動詞の動詞性について動詞的文法範疇をどこまで標示しうるのかという点から考察し, あわせてこの点で出動名詞とは大きく異なることを指摘する.

2. 動詞形態法の概要

サハ語形態法の中心をなすのは接尾辞法である. 表 1 に, 動詞語幹を対象に付加する派生接辞および屈折接辞をまとめる².

動詞語幹には, 定動詞接辞・分詞接辞・副動詞接辞のいずれかが必ず付加される³. 本稿ではこれら 3 種の接辞を動詞語尾と総称する. 動詞語尾の後には, 主語の人称・数を標示する接尾辞が付加される. 主語の標示には表 2 に示す 2 つのセットがあり, 本稿ではそれぞれ POSS 型標示および COP 型標示と呼ぶ⁴ (これを例文中のグロスにおいては (P) や (C) のように略記する). 否定接辞は動詞語尾の前に現れる (ただし本稿で取り上げる動詞語尾については, 多くの場合に否定接辞と後続の動詞語尾が形態的に融合している. それゆえ,

¹ 本稿は, 日本言語学会第 144 回大会におけるワークショップ「東アジア接尾辞型言語における動詞屈折形式: 分詞に関する問題を中心に」での口頭発表に基づく. サハ語の音素目録は次のとおり: /p, b, t, d, č[tʃ], ž[dʒ], k, g, s[s~h], x[χ~q], ʁ, m, n, ŋ[n], ŋ, l, r, j; a, aa, e, ee, o, oo, œ, œœ, u, uu, i, ii, u, uu, y, yy, ua, ie, uo, yœ/. [s] と [h] とは同一の音素と見做せるが, 音声的隔たりを考慮し区別して表記している. ロシア語からの借用語のうち固有語化していないものは, 正書法からのローマ字転写により表記している. サハ語の形容詞は形態統語的に名詞同様に振る舞う. つまり形容詞名詞型言語である.

² 動詞語幹から動詞以外を派生する接辞については, 表 1 から除いてある.

³ 動詞語幹が明示的屈折接辞を伴わない場合がある. その場合, 2 人称単数への命令を表す. 筆者は, 命令法の定動詞接辞 (現在肯定) はゼロ形態であり, さらに命令法における 2 人称単数主語の標示もゼロ形態であると考え.

⁴ POSS 型標示は所有者人称接辞 (所有者の人称・数を標示する) と同形であり, COP 型標示は名詞述語文における述語名詞に付加される接尾辞 (主語の人称・数を標示する) と同形である.

否定を含んだ形式についても定動詞接辞・分詞接辞・副動詞接辞と便宜的に呼ぶことがある)。否定接辞の前には2種類の派生接辞が現れうる。1つは態の接辞であり、もう1つはアスペクトの接辞である。これら派生接辞は義務的な要素ではない。

[表 1] 動詞形態法の概要⁵

	派生接辞		屈折接辞		
	態	アスペクト	極性	動詞語尾	主語の人称・数
動 詞 語 根	使役接辞 再帰接辞 相互共同接辞 受身接辞	多回接辞 強意接辞 完了接辞	否定接辞	定動詞接辞 分詞接辞 副動詞接辞	POSS 型 (P) COP 型 (C)

[表 2] 主語の人称・数の標示

POSS 型 (P)		COP 型 (C)	
1SG -(I)m	1PL -BI	1SG -BI	1PL -BI
2SG -(I)ŋ	2PL -GI	2SG -GI	2PL -GI
3SG -(t)E	3PL -LErE	3SG -∅	3PL -LEr

POSS 型標示は、格接辞が後続する場合に音形を大きく変える。例えば 1 人称単数の POSS 型標示は-(I)m であるが、格接辞が後続する場合には-BI となる。このように接辞の形態をスモールキャピタルを用いて表すのは、音韻的に条件づけられた接辞の異形態の代表形である。例えば、COP 型標示における 1 人称単数の接尾辞-BI は、母音調和と子音の交替による 12 個の異形態 (-bin, -bum, -byn, -bun, -pin, -pum, -pyn, -pun, -min, -mun, -myn, -mun) を代表している。サハ語の接尾辞のほとんどには同様の交替が規則的に見られる。

3. 定動詞接辞と定動詞の用法

動詞語幹に定動詞接辞が付加したものを定動詞と呼ぶ。定動詞は 5 つの法（直説法、命令法、条件法、危惧法、確信法）を区別する。このうち直説法は 5 つの時制（現在、近過去、遠過去、結果過去、未来）を区別し、命令法は 2 つの時制（現在、未来）を区別する。定動詞は常に主節述語として用いられ、主語の人称・数の標示が義務的である。例文(1)では命令法の定動詞が、(2)では危惧法の定動詞が主語の標示を伴って主節述語として用いられている（なお命令法における主語の標示は、表 2 の POSS 型・COP 型のどちらとも異なるものである）。

⁵ 動詞語根の多くはそのまま動詞語幹として機能するが、一部のものは派生接辞を取り去ってしまうと自立的な動詞語幹とはならない。

- (1) *oko-lor-gutu-n saxaluu elbextik aax-tar-uu*
 子-PL-POSS.2PL-ACC サハ語で たくさん 読む-CAUS-IMP.2PL
 「児童たちにサハ語で [本を] たくさん読ませなさい」
- (2) *čuučaa-xuu-n kuot-tar-aaja-ɣum*
 小鳥-POSS.2SG-ACC 逃げる-CAUS-APPR-2SG(C)
 「君は小鳥 [ここでは愛する女性の比喩] を逃がしてしまうかもよ」

本稿では定動詞のうち特に直説法に絞って議論を進める。直説法の定動詞を形成する接辞には表 3 に示す 9 個がある。定動詞直説法における主語の標示には、POSS 型または COP 型が用いられる (表 3 のカッコ内に、それぞれの定動詞が伴う主語の標示を示す)。定動詞直説法の用例を(3)および(4)に示す。

[表 3] 定動詞直説法の接辞

	現在	近過去	遠過去	結果過去	未来
肯定	-(E)r (C) ⁶	-TI (P/C) ⁷	-BIt (P)	-BIt (C)	-(IE)x (P)
否定	-BEt (C)	-BEtI (P/C)	-BEtEx (P)	-BEtEx (C)	(迂言的形式)

- (3) *kim =da xaal-ba-ta baruu œl-byt-tere*
 誰 =も 残る-NEG-N.PST:3SG(C) 皆 死ぬ-D.PST-3PL(P)
 「誰ひとり残らず、皆死んでしまった」
- (4) *en xanna bultuu-gun-uj tug-u sii-gin-ij*
 2SG どこで 狩る:PRES-2SG(C)-Q 何-ACC 食べる:PRES-2SG(C)-Q
 「お前はどこで [獲物を] 狩るのか、何を食べるのか？」

4. 分詞接辞と分詞の用法

動詞語幹に分詞接辞が付加したものを分詞と呼ぶ。分詞接辞には表 4 に示す 7 つの形式がある。分詞は主として連体節述語または名詞節述語として働く。分詞に付加される主語の標示は POSS 型のみである。一部の分詞は主節述語としても機能しうるが (6.1 節を参照)、次の 4.1 節および 4.2 節ではまず、分詞の連体節述語・名詞節述語としての用法を記述する

⁶ 直説法の現在肯定を表す接辞の形式は動詞語幹末の音形により異なる。子音語幹動詞には -Er が付加する (*bil-er* 「知る-PRES」)。母音語幹動詞の場合、語幹末の母音を狭長母音に交替させた上で -r を付加する (*kepsii-r* 「語る-PRES」 < *kepsee* 「語る」)。子音語幹・母音語幹どちらの場合にも、接辞中の子音/r/は、1・2 人称の主語標示が後続する際には脱落し、3 人称複数主語標示 -LEr または -LErE が後続する際には同化により /l/ に交替する。

⁷ 近過去時制における主語の人称・数の標示は、1・2 人称には POSS 型が現れ 3 人称では COP 型が用いられる。主語が 3 人称単数の時、主語の標示はゼロ形態となり [表 2 参照]、動詞語尾の音形はそれぞれ -TE および -BEtE となる。

ことにする.

[表 4] 分詞接辞の形式

	現在	中立時制	過去	未来
肯定	-(E)r	-TEX	-Bit	-(IE)x
否定	-BEt	-BEtEX		-(I)mIEx

4.1 連体節述語としての用法

表 4 に示した 7 個の分詞接辞により形成される分詞は、すべて連体節述語として機能しうる。サハ語の連体節では、節の主語が所有者人称接辞により示されることがある。主名詞が連体節の主語に相当する際、(5)のように分詞にも主名詞にも主語の標示がされない。一方、主名詞が連体節の主語に相当しない場合、主名詞には連体節中の主語の人称・数に対応する所有者人称接辞が義務的に付加される。(6)では、接辞-*um* が連体節中の 1SG 主語を標示している。

- (5) *syrr-er* *kihi*
 走る-PTCP.PRES 人
 「走る人」

- (6) *min* *aaB-ar* *xahuat-um*
 私 読む-PTCP.PRES 新聞-POSS.1SG
 「私が読む新聞」

4.2 名詞節述語としての用法

表 4 に示した 7 個の分詞接辞により形成される分詞は、いずれも名詞節述語として機能しうる。このとき名詞節中の主語の人称・数は、分詞に付加された POSS 型標示により示される。例えば(7)では、分詞に 3SG 主語を標示する-*e* が付加されている。名詞節が主節の主語相当で無い場合には、さらに格接辞も付加される(8)。

- (7) *bu* *kuoska* *xan-tan* *kel-bit-e* *billi-bet*
 この 猫 どこ-ABL 来る-PTCP.PST-3SG(P) 分かる-NEG:PRES:3SG(C)
 「この猫はどこから来たのか分からない」

- (8) *kenčeeri* *bujjul* *sajuultug-ar* *taxs̄w̄-bat-w̄-ttan*
 PSN 今年 夏住居-POSS.3SG:DAT 出る-PTCP.NEG:PRES-3SG(P)-ABL
 munčaar-ar
 気落ちする-PRES:3SG
 「ケンチェーリは今年夏の家に出かけられないために気落ちしている」

4.3 分詞中立時制の時・条件を表す節の述語としての用法

分詞中立時制は、分格接辞を伴った場合に時・条件を表す節の述語として機能する⁸。(9) および(10)に示すように、分詞には常に主語の人称・数が標示される。

- (9) *kynys utuj-a s uɪ-taʒ-u-na biirge*
 昼間 眠る-CVB.SML 伏す-PTCP.NEUT-3SG(P)-PART 一緒に
yæren-er žon-o kel-li-ler
 学ぶ-PTCP.PRES 人々-POSS.3SG 来る-N.PST-3PL(C)
 「[その学生が] 昼間眠っていた時、一緒に勉強している者たちがやって来た」

- (10) *min ulaat-tax-p uɪ-na dojdu-bar tuha-laax*
 1SG 大きくなる-PTCP.NEUT-1SG(P)-PART 国-POSS.1SG:DAT 利益-PROP
kihi buol-a ulaat-ua-m
 人 なる-CVB.SML 大きくなる-FUT-1SG(P)
 「私は大きくなったら故郷のため役に立つ人間になるよう成長するつもりだ」

分詞中立時制のこの用法は意味的には副詞節だと呼びたくなるが、時・条件を表す節として働くのはむしろ分格接辞の存在に依る。分詞が格接辞を伴う点では、むしろ名詞節述語としての用法 [4.2 節] と共通する。この点において分詞自体は名詞的であると言える。

5. 副動詞接辞と副動詞の用法

動詞語幹に副動詞接辞が付加したものを副動詞と呼ぶ。副動詞接辞には表 5 に示す 8 つの形式がある。副動詞は副詞節述語として働くか、あるいは単独で動詞修飾用法の副詞句として働く。副動詞には、副詞節の主語の人称・数を標示することが可能である。副動詞の種類によってはいわゆる主語転換の現象が見られ、主節主語との同主語／異主語に関する制約がある。これらの情報についても、表 5 に示すことにする。

[表 5] 副動詞接辞の形式・主語の標示と主語転換

	共起副動詞	継起副動詞	目的副動詞	即座副動詞
肯定	-II/-E	-(E)n	-(EE)rI	-(EE)t
否定	-(I)mInE	-BEkke	-(I)mEErI	-(I)mEEt
主語転換	不可	可	不可	同主語で標示不可
主語の標示	任意 (C)	任意 (C)	任意 (C)	異主語で標示義務 (P) ⁹

共起副動詞は重複形でのみ副詞節述語になることが可能

⁸ サハ語の分格は通常、命令法における目的語の格として用いられる。分格は古代チュルク語の処格から発達した。分格の時・条件を表す節における用法は、古い段階の処格の名残である。

⁹ 即座副動詞を述語とする副詞節の主語が主節の主語と異なる際、即座副動詞には所有者人称接辞および対格接辞が付加され、さらに対格支配の後置詞 *kutta* 「～と」が置かれる。

5.1 副詞節述語としての用法

表5に示した4種類の副動詞すべてが副詞節述語として働くことが出来る。例文(11)では、継起副動詞の否定形が副詞節述語として働いている。例文(12)のように、副動詞に副詞節の主語の人称・数の標示がなされることがある [表5も参照]。

- (11) *saŋa tutuu-nu sœbylee-bekke moskuba-ka*
新しい 建物-ACC 好む-NEG:CVB.SEQ PLN-DAT
yŋs-el-ler
不平を言う-PRES-3PL(C)
「[彼らは] 新しい建物を気にいらず、モスクワへ不満を言っている」
- (12) *ekseemen-ner eteŋge aah-an-nar praktika-ka tarbas-puup-puut*
試験-PL 無事 過ぎる-CVB.SEQ-3PL(C) 実習-DAT 散る-D.PST-1PL(P)
「試験が無事に終わり、私たちは実習へと散っていった」

5.2 副詞句としての用法（動詞を修飾）

例文(13)のように、副動詞が他の動詞を修飾するのに用いられることがある。ただし4種類の副動詞のうち、即座副動詞は動詞を修飾する用法を欠いている。

- (13) *parom tiks-er sir-i-ger ũksaa-n*
フェリー 着岸する-PTCP:PRES 所-POSS.3SG-DAT 急ぐ-CVB.SEQ
is-pit-im
向かう-D.PST-1SG(P)
「私はフェリーが発着する場所まで急いで向かった」

しばしば「本動詞+補助動詞」の本動詞部分に副動詞が現れる。この場合、構造的には動詞を修飾する用法と類似している。ただしこの時の補助動詞は語彙的意味を失っている¹⁰。例えば(14)では、動詞 *xaal*「残る」が補助動詞として用いられるが、語彙的意味を失い完了アスペクトを表す成分として働いている。

- (14) *muosta-ka sut-an utuj-an xaal-buup-pum*
床-DAT 伏す-CVB.SEQ 眠る-CVB.SEQ 残る-R.PST-1SG(C)
「私は床に横になり眠ってしまった」

6. 動詞屈折形式とその統語機能の相関、特に分詞の主節述語用法について

第3節から第5節では、サハ語の動詞屈折形式（定動詞・分詞・副動詞）それぞれの用

¹⁰ Johanson (1998: 113-114) は、一部のチュルク諸語において発達したこのような補助動詞を *postverb* と呼んでいる。

法を確認した。サハ語の動詞屈折形式は、その統語機能と密接に関連している。すなわち、定動詞は常に主節述語として用いられる。分詞は主として連体節述語または名詞節述語として用いられる。一部の分詞に限っては、後で見るとように主節述語としても用いられる。副動詞は副詞節述語として用いられるか、あるいは動詞を修飾する。つまりサハ語の動詞屈折形式とその統語機能の相関を図式的に示せば表 6 のようになる。

【表 6】 動詞屈折形式と機能の対応

定動詞	分詞		副動詞	
主節述語	名詞節述語	連体節述語	副詞節述語	動詞修飾

表 6 から分かるように、形式と機能の間に「ずれ」が生じるのは、唯一、分詞が主節述語として用いられる場合に限られている。主節述語としての用法を持つのは、一部の分詞のみに限られている。そこで 6.1 節では、分詞の主節述語用法について記述する。

6.1 分詞が主節述語として働く時

4.1 節および 4.2 節で述べたように、すべての分詞が連体節述語用法および名詞節述語用法を有する。7つの分詞のうち以下に示す 2つの形式は、POSS 型標示を伴い主節述語として働くことも可能である。

(A) 分詞現在の肯定形（接尾辞-(E)r による）は、(15)のように POSS 型標示を伴って主節述語として現れ過去進行の意味を表すことがある¹¹。

(15)	<i>kiniler</i>	<i>kuuus-taru-n</i>	<i>olus</i>	<i>taptuu-l-lara</i>
	彼ら	娘-POSS.3PL-ACC	とても	愛する-PTCP.PRES-3PL(P)
	「彼らは娘をととても愛していた」			[Ubrjatova 他編 (1982: 316)]

(B) 分詞中立時制の肯定形（接尾辞-TEX による）は、(16)のように POSS 型標示を伴って主節述語として現れ過去の事態に対する推測を表すことがある¹²。

(16)	<i>umax</i>	<i>uuu-r</i>	<i>kem</i>	<i>kel-leɣ-e</i>
	雌牛	搾乳する-PTCP.PRES	時	来る-PTCP.NEUT-3SG(P)
	「牛の乳搾りをする時期が来たようだ」			

¹¹ 同じ意味を、「分詞現在+動詞 *e*-の近過去」による迂言的形式により表すことも可能である。Ubrjatova 他編 (1982: 315) は、例文(15)に現れるような分詞が POSS 型標示を伴った主節述語は、歴史的には迂言的形式が縮約したものであると述べている。なお否定の場合には迂言的形式のみが可能である。

¹² Ubrjatova 他編 (1982: 341) でも述べられるように、否定の場合には迂言的形式が用いられる。

6.2 定動詞接辞と分詞接辞の音形の類似

表 3 では定動詞接辞の形式を示し、表 4 では分詞接辞の形式を示した。定動詞接辞と分詞接辞には、音形が類似しているものがある（同一のものもある）。これまでの議論では、このような場合にも一方を定動詞接辞、他方を分詞接辞と分けて記述してきた。これとは逆に、同一の動詞語尾による形式が定動詞としても分詞としても働くという分析も可能なように思える。本節では、定動詞接辞と分詞接辞の音形が類似している場合に、それらを同一の形態であると見なせるか否かについて検討していく。

(A) 定動詞直説法現在肯定と分詞現在肯定

この2つの形式はどちらも接尾辞-(E)rの付加により形成される。しかし(17)に示すように、定動詞の場合に限り、1・2 人称主語の標示が後続する場合に接辞中の/rが脱落する。主語の標示についても、定動詞には COP 型標示が用いられるが分詞には POSS 型標示が用いられる。従って、表面的には接尾辞の音形が類似しているとしても、定動詞と分詞を区別しなくてはならない。

(17) *bil-e-bin* / *bil-e-bit* / *bil-er* [定動詞現在]
 知る-PRES-1SG(C) 知る-PRES-1PL(C) 知る-PRES:3SG(C)
 「私は／私たちは／彼は 知っている」

(18) *bil-er-im* / *bil-er-bit* / *bil-er-e* [分詞現在]
 知る-PTCP.PRES-1SG(P) 知る-PTCP.PRES-1PL(P) 知る-PTCP.PRES-3SG(P)
 (主節述語として)「私は／私たちは／彼は 知っていた」
 (名詞節述語として)「私が／私たちが／彼が 知っていること」

(B) 定動詞直説法現在否定・定動詞直説法近過去否定・分詞現在否定

これら 3 つの形式は接尾辞の形式が類似しており、主語の標示が同じ場合に同一の音形が現れることがある。3 つの形式に主語の人称・数の標示を付加した形式を表 7 にまとめて示す（ここでは動詞 *kel* 「来る」を例とする）。表 7 から分かるように、3 つの動詞屈折形式に主語の標示を付加した形式は部分的に同音形式となる¹³。しかしながら少なくとも主語が 3 人称複数の場合には、それぞれが異なる形式で現れる。この形式の違いは、以下の例文(19)から(21)が示すように、意味の違いにも反映する。従って、表面的には接尾辞の音形が類似しているとしても、定動詞と分詞を区別すべきである。

¹³ 3 つの動詞屈折形式に同音形式が見られる別の要因は、1・2 人称の複数では POSS 型標示と COP 型標示が元々同音であることである。

[表 7] 否定 3 形式の比較

	定動詞現在	定動詞近過去	分詞現在
1SG	kel-bep-pin	kel-beti-m	kel-bet-im
2SG	kel-bek-kin	kel-beti-ŋ	kel-bet-iŋ
3SG	kel-bet-∅	kel-bete-∅	kel-bet-e
1PL	kel-bep-pit	kel-beti-bit	kel-bep-pit
2PL	kel-bek-kit	kel-beti-git	kel-bek-kit
3PL	kel-bet-ter	kel-beti-ler	kel-bet-tere

- (19) *ustužuon-nar iti-ni sœbylee-bet-ter* [定動詞現在]
 学生-PL それ-ACC 好む-NEG:PRES-3PL(C)
 「学生たちはそれを好まない」(現在を表す)

- (20) *ustužuon-nar iti-ni sœbylee-beti-ler* [定動詞近過去]
 学生-PL それ-ACC 好む-NEG:PST-3PL(C)
 「学生たちはそれを好まなかった」(過去を表す)

- (21) *ustužuon-nar iti-ni sœbylee-bet-tere* [分詞現在]
 学生-PL それ-ACC 好む-NEG:PTCP.PRES-3PL(P)
 「学生たちはそれを好んでいなかった」(過去進行を表す)

(C) 定動詞直説法未来肯定と分詞未来肯定

この2つの形式はどちらも接尾辞-(IE)xの付加により形成される。ただし定動詞の場合に限り、単数の各人称で縮約形が用いられることがある¹⁴。例えば *tij-iek-iŋ*の縮約形 *tij-ie-ŋ*は、(22)のように主節述語としては用いられるが、(23)のように名詞節述語として用いるのは不可能である。さらに、定動詞には否定形が無く主節における未来時制は迂言的形式が用いられるが(表3参照)、分詞が現れうる環境(連体節述語および名詞節述語)においては否定形が現れうる(表4参照)。従って、表面的には接尾辞の音形が類似しているとしても、定動詞と分詞を区別する分析をすべきである。

- (22) *onno [tij-iek-iŋ / tij-ie-ŋ]* [定動詞未来]
 そこに 着く-FUT-2SG(P)
 「君はそこに到着するであろう」

¹⁴ 筆者の観察によれば、話し言葉ではもっぱら縮約形が用いられ、書き言葉でも縮約形の方が遥かに頻度が高い。サハ語新聞 *Кыым* 紙のデータを活用した筆者のコーパス中で3つの動詞の1人称単数形について調べたところ、縮約形が用いられたのは *buol*「なる」では65例中58例、*ylelee*「働く」では18例中18例、*suruj*「書く」では10例中9例であった。

- (23) *onno* [*tij-ie-ig* / * *tij-ie-ŋ*] *bert* [分詞未来]
 そこに 着く-PTCP.FUT-2SG(P) 良い:COP.3SG
 「君がそこに到着するであろうことは良いことだ」

(D) 定動詞直説法結果過去肯定・定動詞直説法遠過去肯定・分詞過去肯定

これら3つの形式はいずれも接尾辞-**bit**の付加により形成される。定動詞結果過去にはCOP型標示が用いられるが、残りの2つの形式にはPOSS型主語標示が行われる。定動詞遠過去と分詞過去を比べると、(A)から(C)までの3つのケースとは異なり、定動詞と分詞で音形上の違いが生じることは無い。(24)と(25)に示すように、全くの同音形式が異なる統語的環境で現れることが可能である。

- (24) *bevehee* *ogpr-but-um* [定動詞遠過去]
 昨日 作る-D.PST-1SG(P)
 「私は昨日作った」

- (25) *bevehee* *ogpr-but-um* *bu* *baar* [分詞過去]
 昨日 作る-PTCP.PST-1SG(P) ここに ある:COP.3SG
 「私が昨日作ったものがここにある」

Ubrjatova 他編 (1982) 等の先行研究でも筆者の分析においても、定動詞遠過去と分詞過去は形式上区別されてきた。これに対し、単一の動詞語尾-**bit**が、主節述語・連体節述語・名詞節述語の3つにまたがった用法を持つと解釈しても不都合はない。この分析を行った場合、定動詞直説法遠過去という形式を認めない代わりに、分詞過去形にも主節述語としての用法(遠過去を表す)が存在するという解釈を行うことになる¹⁵。ただしこの分析を行った場合でも、表6に示したサハ語の動詞屈折形式とその統語機能の分布に大きくは影響しない。

次の表8には、本節で行った議論をまとめる。動詞語尾の音形が類似していたとしても、定動詞と分詞の区別は主語標示のタイプの違いや音形上の違いに反映している。ただし定動詞遠過去と分詞過去に限っては、定動詞と分詞を形式上で区別する根拠は無い。

¹⁵ 先行研究および筆者の分析において、遠過去を分詞の主節述語用法とは考えずに定動詞直説法の形式に含めるのは、遠過去が最もデフォルトの過去形であると見なせる(体験過去を表す)点が必要な理由だと推測できる。

[表 8] 定動詞と分詞の区別

		主語標示	その他の特徴
接尾辞-(E)r	定動詞現在	COP 型	/r/が脱落する (1・2 人称のみ)
	分詞現在	POSS 型	/r/が保たれる
接尾辞-BEt	定動詞現在	COP 型	
	定動詞近過去	COP 型／POSS 型	-BEtI + 主語標示
	分詞現在	POSS 型	
接尾辞-(IE)x	定動詞未来	POSS 型	縮約形あり, 否定には迂言的形式
	分詞未来	POSS 型	縮約形なし, 否定形を持つ
接尾辞-BIt	定動詞結果過去	COP 型	
	定動詞遠過去	POSS 型	
	分詞過去	POSS 型	

7. 分詞・副動詞の動詞性 —特に出動名詞との対比—

通言語的に、分詞や副動詞は、定動詞と比べ様々な点において動詞性の低い形式であることが多い。ところがサハ語の分詞および副動詞の動詞性は、定動詞と比べ大きく劣るものではない¹⁶。ここでは動詞屈折形式の動詞性について、動詞的文法範疇の標示という観点から考えてみたい。サハ語の動詞的文法範疇としては、態・アスペクト・肯否・時制・法・主語の標示がある。

先に副動詞について見てみよう。表 1 でも示したように、サハ語には態やアスペクトを表す派生接辞がある。これらの派生接辞は、*tut-tar-taa-n*「次々と渡して」(掴む-CAUS-ITER-CVB.SEQ)のように副動詞接辞の前に生起可能である。先の例文(11)中の副動詞には否定が、(12)中の副動詞には主語の標示がなされている。つまり副動詞には、動詞的文法範疇のうち、時制と法を除くすべてを標示可能である。

次に分詞について見てみる。分詞も *tut-tar-taa-but*「次々と渡した」(掴む-CAUS-ITER-PTCP.PST)のように態やアスペクトを表す派生接辞と共起する。また次の例文(26)が示すように、分詞には否定・時制・主語の標示を行うことが可能である。

- (26) *soččo* *kerexsee-betex-piti-n* *bil-bet-ter*
 それほど 興味を持つ-NEG:PTCP.PST-1PL(P)-ACC 知る-NEG:PRES-3PL(C)
 「私たちがそれほど興味を持たなかったことを彼らは知らない」

サハ語の出動名詞(動詞から派生した名詞)の中には、項構造を保持しうるものがある。例えば(27)における派生名詞 *sajumnaruuu*「発達」は、等位関係にある 2 つの対格目的語を保持している。例文(27)では派生接辞-*uuu*により名詞化される範囲を [] により示す。

¹⁶ 他のチュルク諸語においては、副動詞に主語の標示を行うものは無い。

- (27) [*xotugu* *noruot-tar* *èkonomika-laruu-n* *uonna* *kultuura-laruu-n*
北の 民族-PL 経済-POSS.3PL-ACC と 文化-POSS.3PL-ACC
sajum-nar]-*uu-ga* *orojuon-nar* *ulaxan* *oruol-laax-tar*
発達する-CAUS-NMLZ-DAT 地域-PL 大きい 役割-PROP-COP.3PL
「北方諸民族の経済と文化を発達させることに各地域が大きな役割を持っている」

ただし分詞とは異なり、出動名詞には肯否・時制・主語の標示を行うことは不可能である。分詞と出動名詞はどちらも名詞化の機能を持ち、項構造を保持する点で共通するが、動詞的文法範疇をどこまで保持しうるかにおいて異なっている¹⁷。3種類の動詞屈折形式と出動名詞が標示しうる動詞的文法範疇を表9にまとめる。

[表9] 動詞屈折形式・出動名詞が標示しうる動詞的文法範疇

	態	アスペクト	肯否	時制	法	主語の標示
定動詞	○	○	○	○	○	○
分詞	○	○	○	○	×	○
副動詞	○	○	○	×	×	○
出動名詞	○	○	×	×	×	×

8. まとめ

サハ語の動詞屈折形式は伝統的に定動詞・分詞・副動詞の3種に分類されてきた。サハ語の大きな特徴は、この動詞屈折形式の分類が統語機能と密接に関連している点である。すなわち、定動詞は常に主節述語として用いられ、分詞は連体節述語あるいは名詞節述語として用いられ、副動詞は副詞節述語として用いられるかあるいは動詞を修飾する。このような対応から外れるのは、一部の分詞が主節述語として用いられる場合のみである(6.1節参照)。

定動詞接辞と分詞接辞の音形が類似することがあるが、定動詞と分詞の区別は主語標示のタイプの違いや音形上の違いに反映している。ただし定動詞遠過去と分詞過去については、形式上での振る舞いの違いは見られない。

サハ語の分詞および副動詞の動詞性は、定動詞と比べ決して大きく劣るものではない。分詞や副動詞には動詞的文法範疇の多くを標示しうる。分詞には肯否・時制・主語の標示が、副動詞には肯否および主語の標示がなされる。項構造を保持しうる出動名詞があるが、分詞や副動詞とは対照的に、出動名詞にはこれらの動詞的範疇が標示されない。

¹⁷ 分詞と出動名詞の形態統語的振る舞いの違いを詳しく論じた Ebata (2011) も参照されたい。

略号

-	接辞境界	D.PST	遠過去	PLN	地名
=	接語境界	DAT	与格	POSS	所有者人称接辞
1	1人称	FUT	未来	PRES	現在
2	2人称	IMP	命令	PROP	propriative
3	3人称	NEG	否定	PSN	人名
ABL	奪格	NEUT	(形動詞)中立時制	Q	疑問
ACC	対格	NMLZ	名詞化	R.PST	結果過去
APPR	危惧法	N.PST	近過去	RECP	相互
CAUS	使役	PART	分格	SG	単数
COP	コピュラ	PST	過去	SEQ	継起(副動詞)
CVB	副動詞	PL	複数	SML	共起(副動詞)

参考文献

- Ebata, Fuyuki. (2011) Syntactic derivation and nominalization/verbalization in Sakha (Yakut). Kurebito Tokusu (ed.) *Linguistic Typology of the North*, 2. 67-85. ILCAA, TUFS.
- Johanson, Lars. (1998) The History of Turkic. In: Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic Languages*. 81-125. London/New York: Routledge.
- Ubrjatova, E.I., E.I. Korkina, L.N. Xaritonov, and N.E. Petrov. (eds.) (1982) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.

Sakha (Yakut) Verbal Inflectional Forms and Their Syntactic Functions

Fuyuki EBATA

(Japan Society for the Promotion of Science / ILCAA, TUFS)

Sakha verbal inflectional forms are traditionally divided into three classes: finite verbs, participles, and converbs. It is very salient in Sakha that this classification is strongly related to the syntactic functions of these classes. Some participles may appear as the predicate of a main clause, which is the only case to which the relation between form and function does not apply. Sakha participles can contain verbal grammatical categories such as polarity, tense, and person/number; Sakha converbs also exhibit polarity and person/number. Compared with these inflectional forms, deverbal nouns have fewer verbal properties; specifically, they cannot contain polarity or person/number, although they can retain the valency of the base verb.

(えばた・ふゆき fuyuki@mtc.biglobe.ne.jp)